

石郡英一の

“老話”

介護職に聞いてほしい
高齢者と家族の物語

第7話

思い出泥棒

いしこおり・えいいち

日本福祉介護総研株式会社代表取締役会長。医療・介護運営教育コンサルタント。看護師／救急救命士。学校法人美芸学園理事。病棟看護長、老健管理部長、身体障害者療護施設事務長を経て、介護保険施設などの運営教育コンサルタントを行う会社を設立。役者かと思うほどの演技とユーモア、現場の方が、思わずうなずいてしまう体験を豊富に持っている人気の講師。主な著書に『介護現場の困ったスタッフを戦力に変える指導法』『医療依存度の高い高齢者のケア』『身体機能の低下した重度利用者のケア』『石郡流 施設看護師のデキる仕事術』（いずれも日総研出版）がある。

1. 思い出

「ただいま！」

仕事から帰った馨^{かおる}が真っ先に向かう部屋は、母親の寝室を兼ねた仏間である。

「お母さん、またアルバムを開いているの？」

馨は母幸^{さち}に目をやって声をかけると、幸に背を向ける形で仏壇^{ぶつぐや}の前に正座し、父福哉の遺影に向かって静かに手を合わせた。『お父さんただいま。今日肝臓がんのターミナルで入院していた患者さんが、病院でお亡くなりになったの。その方、認知症も併発されていて、よく夜中に叫んでいらしたから、つらかつ

たのだと思うわ…。そちらの世界でよくしてあげてね』

馨は心の中で福哉にそう報告すると、おもむろに幸の方へ振り返った。するとその時を待っていましたと云わんばかりに幸が話しかけてきた。

「ハハハハッ見て馨ちゃん、このお父さんの間の抜けた顔！これは2人で天橋立に行った時に、“この景色は股の間から眺めるんだぞ”って自分で言っておきながら、お父さんの後ろでカメラを構える私の方に向かって股の間から顔を覗かせた時のものなの！ハハハハッこの間の抜けた顔と云ったら、おかしかったらありゃしない！」

この話はもう何度聞いたことだろう…。

「ほら、こっちも傑作よ！これは京都嵐山の保津川下りで撮った船上での集合写真。後ろの席の人の広げた手が、お父さんの頭の後ろでパーを出しているみたいに見えるでしょ！お父さん、家に送られてきたこの写真を見て、“俺を馬鹿にしているみたいな写真だな！”って怒ったのよ。大人気ないでしょ、本当にもう…」

この話もう何度聞いたことだろう…。

「そうだね」

壊れたレコードのような幸の思い出話に、馨はニコッと笑って見せた。

「それから…」

次に母が見せたい写真とそのストーリーはもう分かっている。おそらく次は博多で、ゴマ鯖の前に夫婦で見つめ合っている写真で、博多のゴマ鯖は、魚の種類なのか、調理名なのかで父ともめたという話だ。そしてその次は、輪島の御陣乗太鼓をバックに父が鬼の形相でおどけている写真だ…。

「今日は牛肉が安かったから買ってきたの。お母さんの好物のコロケをつくるから少し待っていてね」

馨はそう云うと、幸の思い出話を遮り、買い物袋を持って仏間を立ち、台所に向かった。

馨は現在48歳独身で、総合病院の内科病棟に勤務する看護師である。

馨は、福哉が他界した1年後の29歳の時に、同僚の医師と結婚するが、2年で離婚して実家へ戻った。以後、実家で17年間幸と同居して暮らしている。

幸は現在73歳。70歳の時、精密検査でアルツハイマー型認知症と診断されてから早3年が経過しており、介護認定は要介護1と判定されていた。日中はデイサービスや訪問介護サービスなどを利用しながら、何とか自宅で暮らしてはいるものの、中核症状としての物忘れや見当識障害、周辺症状としての依存性や何もやりたがらない自閉状態が現れていた。

2. プロローグ

(1) 予兆

「お母さんご飯ができましたよ」

馨は仏間まで足を運び、アルバムを広げている幸に声をかけた。

毎日の食事は、馨が実家に戻ってきてからも幸がつくっていたが、4年前、幸に認知症の症状が出はじめてからは、火を点けっぱなしにすることがあったため馨が心配し、調理器具をIHクッキングヒーターに替え、馨が台所に立つようになった。

「今日のご馳走は何かしら？」

「お母さんが好きな牛肉のコロッケ！ 副菜としてほうれん草のお浸しとひじきの煮物、きんぴらごぼうの3品をご用意しました！」

「わあ！ ご馳走ね！」

幸はアルバムを畳みながら小躍りして喜んだ。

幸の好物はコロッケで、小学生の頃に食べたコロッケの味が忘れられないと云う。逆に、幼い頃から毎日のように食べていた魚は嫌いだった。

馨は幸の手を引いて、仏間からダイニングまで誘導すると、テーブルの下に収納してあるいすを引いて幸を座らせた。馨も幸の右隣の席に座ると二人は揃って手を合わせた。

「いただきます！」

幸は真っ先にコロッケに手を伸ばすと、口いっぱい頬張った。

「かあちゃんの作ったコロッケはとってもおいしい」

幸の溢れんばかりの笑顔を見て、馨は幸せな気分になった。

しかしこの時実は、幸は馨を自分の母親と人物誤認しており、^{かあ}「母ちゃん」と云ったのだが、馨は「かおちゃん」と聞き間違え、自分のことだと錯覚していた。

この時の人物誤認が、その夜引き起こされる幸の人格変化と、その後続く人格崩壊へのプロローグとは、馨が知る由もなかった。

(2) 事件

「かあちゃん！ 私のパンツ盗ったでしょ！ 返して！」

幸の大きな声で馨は目が覚めた。ベッドで休んでいた馨は、小玉電球の薄暗い明かりを頼りに、^{まなこ}寝ぼけ眼で辺りを見渡すと、馨の枕元にあるたんすの横で幸が叫んでいた。時計の針は深夜2時を少し回ったところで、覚醒して間もない馨の不明瞭な思考では、何が起きているのかを把握できなかった。

「お母さんどうしたの？ まだ夜中の2時よ…パンツがどうかしたの…？」

「かあちゃん！ 私のパンツ盗ったでしょ！ 返して！」

幸は同じことを繰り返し叫んだ。

馨は状況を把握できないまま、ベッド横の床頭台に置いてある電気のリモコンで部屋の明かりを点けると、馨の枕元にある衣装ダンスが開けられ、馨の衣類

が床一面に広げられていた。

「何これ！ お母さん！」

今度は馨が叫んだ。

「かあちゃん！ 私のパンツ取ったでしょ！ 返して！」

幸は馨のベッド横に座り込んで、同じことを繰り返し叫んでいる。馨が幸の目を見ると、そこには狂気の沙汰が見て取れた。『お母さんが壊れた…』咄嗟に馨はそう感じた。

しかし次の瞬間、病院で夜間叫んでいた認知症の患者さんのことを思い出し、馨は看護師の顔に変容した。

「パンツがなくなったの？ ここはあなたのお部屋ではないでしょう。一緒に探してあげるから、自分のお部屋を探してみましょう」

馨はパニックを起こしている幸に、優しく語りかけた。すると幸は、ふと我に返ったような目に戻り、明るくなった部屋を見渡した。

「さあ、お部屋に戻りましょう」

馨が促すと、幸は黙って馨の後に付いてきた。馨がそのまま幸のベッドが置かれている仏間に誘導すると、仏間は電気が点いたままだった。

馨はベッドの掛け布団を広げ、手を添えて幸をベッドに寝かせた。幸はさっきまでのパニックが嘘だったかのように、馨に身を委ね静かにベッドに横たわった。

「今日はもう遅いからまた明日。お休みなさい」

そう云って馨は仏間の電気を消した。

幸を寝かせつけ、自分の部屋に戻った馨は、床に散らばった服を見て、現実の世界に引き戻された。

すると心の底から得も言われぬ悲しみが突き上げてきて鳴咽した。

『お母さん…』

3. 展開

幸の昼夜逆転現象と、荷物探しと物盗られ妄想は、それからしばしば繰り返されるようになった。

そのような状況が半年続いたところで、馨はシフトの休みを利用して、意を決して幸を馨の勤務する病院の物忘れ外来に連れて行った。

診察後、馨だけ診察室に残され、医師より説明を受けた。「お母様の記憶は、最近の事柄から結婚当時の記憶まで遡って欠落しているように思えます。また、馨さんを自分の母親だと人物誤認されており、見当識障害の度合いも随分進行しています。そこで、アリセプトと、アルツハイマー型認知症の認知症状進行抑制薬メマリーという薬を処方致しました。また、問診で仰っていた荷物探しと物盗られ妄想といった異常行動や妄想は、これからも暫く続くと思われます。そこで今回、興奮や攻撃性を抑制するためにリスパダールという向精神薬と抑肝散とい

う薬をお出ししましたが、ADLが低下していくと思われまので、お母様の転倒には十分お気を付けください。また今後は、馨さん自身の負担も増していくと思われまので、ショートステイや認知症のグループホームなどの入居型の介護サービスを利用なさってはいかがでしょうか？ 医療ソーシャルワーカーに連絡しておきますので、この後相談なさるとよいと思います」「ありがとうございました」

「お大事になさってください」

馨が医師に一礼し診察室を出ると、外来のいすに幸と看護師が腰掛けていた。馨は同僚の看護師に軽く会釈し幸に声をかけた。

「お母さんお待ちせ」

幸は馨の言葉に反応しなかった。

「クラークが参りますので、暫くお待ちください」

そう云うと同僚の看護師は立ち上がり、馨に自分の座っていた場所を手で勧めた。

幸と馨が外来の長いすに座って待っていると、診察室の中からクラークが出てきて、馨に話しかけてきた。

「今からケースワーカー室のご案内致します。本日の処方箋と会計用紙は、後程ケースワーカー室にお届け致します」

クラークの話し振りから、時間短縮の便宜を図ってくれたようであった。馨はそのクラークを知らなかったが、クラークは

同僚の馨を知っている様子で、笑顔で一礼すると、掌を上に向けて幸と馨をケースワーカー室まで誘導した。

ケースワーカー室に移動し、医療ソーシャルワーカーの吉田と話をする、馨が同僚であり、年恰好が同年代の女性という共通点からか、吉田は親身になって馨の相談相手になってくれた。

馨と吉田がケースワーカー室で話をしている間、馨の隣に居た幸は、ずっといすに座ったまま眠って過ごした。

結局馨は、自宅での2人の生活は難しいと判断し、馨が勤務する病院と同じ法人が運営する認知症のグループホーム「サンクス^{いつき}の樹」への入居を決めた。

サンクス^{いつき}の樹は勤務する病院と同じ法人が運営しているため、優先的に入居に便宜を図ってもらえることや、3日前に退去者が出たという幸運にも恵まれて、診察後2日で、幸はサンクス^{いつき}の樹へ入居の運びとなった。

あまりに急な展開であったが、馨は内心ほっとしていた。なぜならば、幸をグループホームへ入居させることへの申し訳なさや、親孝行として自宅で介護を行いたいという思いももちろんあったが、いつまで続くか分からない介護地獄は、それ以上に不安だったからである。

4. 思い出泥棒

入居前日の夜も、幸は馨の部屋のたんすを開いて、服を床に

広げていた。
「私の服を盗ったでしょ…かあちゃん、返して…」

幸は医師から処方された薬が効いている様子で、ボーッとした表情で物盗られ妄想を馨に訴えた。

馨はその様子を横目で見ながら、廊下を挟んだ向かいにある幸の部屋で、明日の入居に必要な物品をバッグに詰めて準備していた。

「お母さんは、明日からグループホームサンクスの樹に入居してもらったことになったの、ごめんね。物が盗られたように思えるからお母さんもつらいだろうけど、私もお母さんと同じようにつらいの、分かってね、お母さん……」

馨は自分に言い聞かせるように幸に向かって話した。幸は馨の話に反応せず、なくなった^も記憶を探すのに夢中になっている。

その時馨は、仏壇の横の棚に、無造作に置かれているアルバムを見つけた。

「あっ！ このアルバム…お母さんの一番大切なものじゃない！ そういえば、前は写真に穴が開くほど見ていたのに、最近このアルバムを開かなくなったよね…」

すると馨は、ふっと思いついたようにアルバムを持って幸に駆け寄り、アルバムを開いて幸に見せると、何百回となく幸から聞かされたフレーズを話し始めた。

「見てお母さん、このお父さんの

間の抜けた顔！ これは二人で天橋立に行った時に、“この景色は股の間から眺めるんだぞ”って、自分で言っておきながら、お父さんの後ろでカメラを構えるお母さんの方に向かって股の間から顔を覗かせた時のものなの！ ハハハハッこの間の抜けた顔といたら、おかしいったらありゃしない！」

何も考えなくても、幸の思い出のフレーズが馨の口を衝いて出た。馨は幸が笑顔で楽しそうに語っている姿を思い出し、あの頃の幸が乗り移ったように笑った。

しかし、幸は無表情でアルバムを眺めていた。

「お母さん、覚えていないの？ この写真。あれだけ楽しそうに話していたじゃない！…じゃあこの人は誰？」

馨が福哉を指さして幸に聞いてみた。

「福哉さん」

幸は^{ぼくとつ}朴訥とした表情で答えた。

「じゃあ私は？」

馨は自分を指さして尋ねた。

「かあちゃん」

やはり馨のことは認識していなかった。そこで今度は、アルバムをめくって違う写真の福哉を指さし聞いてみた。

「じゃあこの人は誰？」

「福哉さん」

どの写真を見ても福哉だけは分かるようだった。幸は多くの記憶をなくしても、福哉のことは忘れていなかった。福哉

を愛した記憶は残っていたのだ。馨はうれしさのあまり涙が溢れた。

「じゃあこの写真は…福哉さんと何をしていた時の写真？」

馨は涙ながらに質問した。

「知らない…」

「これは京都嵐山の保津川下りで撮った船上での集合写真。後ろの席の人の広げた手が、お父さんの頭の後ろでパーを出しているみたいに見えるでしょ！ お父さん、家に送られてきたこの写真を見て、“俺を馬鹿にしているみたいな写真だな！”って怒ったのよ。大人気ないでしょ、本当にもう…」

また幸の思い出のフレーズが馨の口を衝いて出た。

すると幸が言葉を絞り出すように言った。

「思い出泥棒…」

その言葉は、愛した福哉との思い出が跡形もなくなかった、幸の無念さが凝縮されたような言葉で、まさに言い得て妙であった。

「えっ？」

あまりに的確な表現に馨は驚きを隠せなかった。同時に馨は幸がいじらしく思えて、幸を強く抱きしめた。

「そう、私は思い出泥棒…安心してお母さん…お母さんとお父さんの思い出を、私がずっと大切にしていあげるからね」

馨は、幸の愛の深さに感動の涙が止まらなかった。

5. 新たな生活

ピンポン！

玄関のチャイムが鳴った。時刻は朝7時10分を少し回ったところだ。

「は～い！」

「さあ、お母さん。お迎えにいらしたわよ」

支度を整えている幸に馨は声をかけた。

幸は結局グループホームに入

居することはなかった。グループホームに入居する前日の出来事が、馨の気持ちを変え、馨は幸を自宅で介護することに決めたのである。

「おはようございます。お迎えに上がりました」

デイサービスの送迎に現れた若い男性の送迎員は、玄関先で幸と馨に目をやりながら明るく挨拶した。

「では、お願い致します。お母

さん行ってらっしゃい。またあとでね」

馨はそう云って送迎員に頭を下げると、幸に手を振った。

幸は馨の見送りに笑顔で応えた。

「ってきます」

馨は、走り出したデイサービスの送迎車が見えなくなるまで玄関先で見送った。